



埼玉の社叢

多氣比売神社

桶川市篠津五十八

当社は、『延喜式』神名帳に所載される足立郡四座のうちの「多氣比売神社」であると考えられている。近世の篠津村は家数十二軒の村であったが、かつて神社近くに縄文から古墳時代の遺跡等があったことから、古代におけるこの地域の拠点であったようである。

篠津の地名や祭神の「豊蘆建姫命」が示すように、社前を流れる赤堀川は、かつて元荒川流路であった名残から、川沿いに篠や蘆の生える沼池が点在し、当社の西側にもかつては篠津沼と呼ばれた大きな沼があったという。特に、慶長年間、当地のある鴻巣領と小室領一万石を領知するとともに、徳川家康の蔵入地のうち百万石を支配した関東代官頭、伊奈備前守忠次が、当所から一・八キロメートル下流の綾瀬川合流地点に六百メートルもの「備前堤」を築いて綾瀬川に元荒川と赤堀川が流れ込まないように締め切り、赤堀川は元荒川に合流させられた。これにより綾瀬川下流域の村は水害を免れるようになったが、逆に、当地などの備前堤外（上流）は遊水池とされ、赤堀川流域の村は水害を頻繁に受けるようになった。

『新編武蔵風土記稿』の篠津村の項には「姫宮社 当社は『延喜式』内多氣比賣神社にて、祭神は豊蘆建姫命なり、神體は女體にて十二単衣冠の坐像、本社の前に幣殿拜殿側に椎の大木二株あり、往古は一樹なりと云、何の頃にや枯て其朽たる根際二樹合して生ぜり、根の圍み二株合して二丈餘、又一樹は周径一丈六尺餘、何れも古木にて神木とす、金剛寺の持、末社 稻荷社 三峰社」とある。

このスタジイは樹齢六百年ともされ、遠目には一本の木のように刈り込んだようにきれいなドーム状の樹形になっているが、右の『風土記稿』にもあるように元を中心の木が枯れて葉が箒立ちしており、根元周りは六メートルを超え、「多氣比売神社の大シイ」として市の天然記念物に指定されている。境内には、同様なシイが四株あり、これらだけで鎮守の杜が形成されているといつてよい程である。中でも社殿正面のものには、毎年十二月二十五日に氏子総出で神木の注連縄を取り替える「注連飾り」が行われている。

常緑広葉樹のスタジイの木は、平地においての古木は鎮守の杜に限られてしまう。その用途の少なさゆえ、農業開発において優先的に伐採されてしまうが、開発以前の地域環境を伝える大切な自然遺産である。